

テーマ上映会「映像の学校Ⅱ」

会 期：2011年6月10日(金)～12日(日)、21日(火)～23日(木) ※6日間

会 場：アートスペースA

今日、映画と呼ばれる芸術分野は、劇映画、ドキュメンタリー、実験映画を、主要な三つのジャンルとして形成されている。愛知芸術文化センターでは、これらジャンルのうち、この地方において商業ベースではほとんど公開されることのない実験映画や、その系譜に連なるビデオ・アートの上映を軸に、ドキュメンタリーや自主制作映画など、上映の機会が限られている作品を積極的に紹介する形で、継続的な上映活動を行ってきた。しがしながら現代とは異なり、芸術としての映画が確立された1910～20年代のサイレント映画の時代には、これら三つのジャンルは渾然とした状況にあり、あたかも映画全体が実験的な表現領域として、黎明期特有の活気を帯びていた。

近年ではサイレント映画は、音声を伴わない古い時代の映像表現と見なされがちで、この地方でも上映の機会が非常に少なくなっているが、本来、映像によって語ることを旨とする映画の表現においては、基礎的な手法や技術はこの時代に確立されたといつて良く、初心者や入門者にとっては、むしろ積極的に観るべき作品といえる。またこの時代は、映像言語とは何かを模索している時期でもあったため、劇映画においても非常に野心的で実験的な作品が多いことも特徴である。

この上映会は、こうした現状を踏まえ、初期のサイレント映画を振り返りつつ、現代の実験的な作品や、今後の成長が期待される若手の新鮮な作品まで、時代を越えて貫かれてきた映像表現における実験精神に、作品鑑賞を通して触れる機会を作ることを意図したもので、昨年開催し好評だったものを受けて企画した第二弾である。今回はサイレント映画において最も実験的とも評される、D.W. グリフィスの伝説的な作品『イントレランス』(1916年)を、サイレントと後年に音楽が付けられたサウンド版で比較上映する試みが、映画ファンから好評を得た。現代の作品では、『冷たい熱帯魚』(2010年)などで注目を集めている園子温『うつしみ』(1999年、愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品第8弾)に、岡山から観客が駆け付けるといった反応があった。またこの地方の若手から中堅作家の作品を集めたプログラム「愛知の新世代たち」にも多くの観客が訪れ、活況を呈した。